The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Conversations between individuals with autism and typical development : similarities, differences, and exchange characteristics and patterns from the perspective of verbal response modes
Author(s)	越村, 早貴子
Citation	大阪大学, 2017, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/67172
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（　　越村　早貴子　　）	
論文題名	Conversations between individuals with autism and typical development: similarities, differences, and exchange characteristics and patterns from the perspective of verbal response modes （自閉症者と定型発達者はどのように会話をしているのか―VRMから見た共通点、相違点、やりとりの特徴とパターン―）

論文内容の要旨

〔 目　　的 〕

本研究では、対等な立場で会話が成り立つ自閉症者（以下、ASD者）と定型発達者（以下、TD者）のコミュニケーションにはどのような特徴があるのかをVerbal Response Modes（以下、VRM）を用いて明らかにすることを目的とした。仮説は以下の３つである。①ASD者とTD者では発話時間に差が見られる、②ASD者とTD者では会話において使用するカテゴリーが異なる、③ASD者とTD者の会話では、TD者の発話が会話維持に何らかの役割を果たしている。上記の３点の仮説について検討した。

〔 方法ならびに成績 〕

ASD者およびTD者の二人を一組とし、計18組を対象にして会話実験を行った。会話時間は１０分間で、テーマは自由とした。会話分析には、VRMを用いた。総発話時間、総発話回数について比較したところ、両者には差が見られなかった。VRMにより会話の発話を８種類（開示、情報、応答、質問、反射、確認、解釈、指示）に分類し発話時間や回数について比較したところ、おおよそ使用するカテゴリーは同種類、同程度であるが、「質問」「応答」のカテゴリーにおいてASD者はTD者と比較して使用回数や使用時間が少なかった。また、ASD者とTD者では複数のカテゴリーの使用に差が見られ、ASD者は使用が少なかった。ASD者が特定のカテゴリーを使って最初に発話をすると、TD者が最初に発話した場合と比較して発話時間が長くなることが示された。

〔 総　　括 〕

VRMを用いてASD者とTD者の二者の会話を検討したところ、ASD者とTD者の総発話回数および総発話時間は全体的に差が見られず会話の返報性はASD者とTD者の間でも見られること、ASD者とTD者では会話において使用するカテゴリーはおおよそ共通しているが、「質問」「応答」の使用で差があること、ASD者とTD者の会話では、ASD者が特定のカテゴリーを使用したときに二者の発話時間が長くなることからTD者が会話維持の役割を果たしている可能性があることなど二者の会話の共通点、相違点、やりとりの共通性とパターンを明らかにすることができた。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　　名　（　　越　村　早　貴　子　　）		
論文審査担当者	（職）	氏　　名
	主　査　　教　授	中　川　彰　子
	副　査　　教　授	三　邉　義　雄
	副　査　　教　授	片　山　泰　一

論文審査の結果の要旨

自閉症のコミュニケーションについては、これまで幼児期や児童期を対象として支援者との会話もしくは同年代の仲間関係でのコミュニケーションに関する研究が多くなされ、それらの研究により自閉症者のコミュニケーションの特異性が明らかにされてきた。しかし、大人を対象とした対等な関係でのコミュニケーションに関してはこれまでほとんど研究されてきていない。自閉症者にとって会話は自然に学ぶことが難しいものであることから、幼児期や児童期以降も支援は必要であると考えられるが、その必要性や支援内容については十分に明らかになっているとは言い難い。

本研究では、会話の指標としてVerbal Response Modes（VRM）を用いて自閉症者と定型発達者の会話を分析した。実験は、二者が１０分間の会話を行った後に互いの会話の印象および会話した相手への印象について評定を行うものだった。分析は、会話を文字に起こし、大学院生二名が発話内容をVRMの８つのカテゴリーに分類した後、発話回数や時間についてまとめたデータについて統計処理を行った。総発話時間、総発話回数について比較したところ、自閉症者と定型発達者には差が見られなかった。VRMにより会話の発話を８種類（開示、情報、応答、質問、反射、確認、解釈、指示）に分類しそれぞれの発話時間や回数について比較したところ、おおよそ使用するカテゴリーは同種類、同程度であることが示された。しかし、「質問」「応答」のカテゴリーにおいて自閉症者は定型発達者と比較して使用回数や使用時間が少なかった。また、自閉症者と定型発達者では一回の発話中のカテゴリーの使用に差が見られ、自閉症者は複数カテゴリーの使用が少ないことが示された。また、自閉症者が特定のカテゴリーを使って最初に発話をすると、定型発達者が最初に発話した場合と比較して発話時間が長くなることも示された。VRMを用いて自閉症者と定型発達者の二者の会話を検討したところ、自閉症者と定型発達者の総発話回数および総発話時間は全体的に差が見られず会話の返報性は自閉症者と定型発達者の間でも見られること、自閉症者と定型発達者では会話において使用するカテゴリーはおおよそ共通しているが、「質問」「応答」の使用で差があること、自閉症者と定型発達者の会話では、自閉症者が特定のカテゴリーを使用したときに二者の発話時間が長くなることから定型発達者が会話維持の役割を果たしている可能性があることなど二者の会話の共通点、相違点、やりとりの共通性とパターンを明らかにすることができた。自閉症者と定型発達者の二者の会話には、自閉症者に対する幼少期からの継続した支援とともに、定型発達者が自閉症者と会話を行う際に有用な役割が果たせるよう、定型発達者に対する心理教育、啓蒙の必要性も示唆された。

本研究は、ある程度のレベルでコミュニケーションが成り立つ、支援者と要支援者でない対等な二者関係の会話を定量的に分析した点は、これまでにない研究であり評価できるものと考えられる。

しかし、方法論についてはいくつかの問題が認められた。まず、自閉症者の診断については18名中16名がDISCOの症状評価によるものだが、残り２名については同様ではなかった。これについては、一貫した症状評価による診断を行う必要があった。さらに、定型発達者についてのIQが評価されておらず、同等の知的レベルでない可能性を否定できないものであった。それぞれの社会的な立場や婚姻関係の有無にも会話に影響がある可能性があることから、それらについても同等であることの確認を行う必要があった。自閉症者と定型発達者の集団ができるだけ等質なものとなるように、実験協力者

の募集を行う際には綿密に計画を行う必要があった。会話状況による違いを比較検討するために、自閉症者同士、定型発達者同士、また親密度の違う組み合わせによる会話を検討することも必要だったと思われる。本研究は、自閉症者と定型発達者の会話を定量的なデータとして分析した点でこれまでにない研究報告である。自閉症者の適応感を高めるための重要な因子である言語環境に着目した貴重な研究であり、学位に値するものと認める。